

震災被害とレジリエンス

副 田 あけみ

はじめに

2011年3月31日をもって首都大学を退職するにあたり、3月19日に最後の講義をさせていただくことになっていた。しかし、東日本大震災が3月11日に起きたので延期となり、半年後の11月19日にやらせていただいた。この場をお借りして、社会福祉学分野の先生方に厚く御礼を申し上げます。また、当日参加していただいた石川知広学系長、かつての同僚の先生方、卒業生および現役の学生のみなさんに心より感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。

当日は、「ケースワーカーとクライアントの葛藤関係」という内容の講義を行った。社会福祉学教室から、本紀要にその講義内容を収録してはどうか、というお話をいただいたのだが、すでに他の文献に収録することに決めていた。そこで、昨年もっとも衝撃を受けた東北の被災地訪問の体験と、震災遺児の残された親御さんにインタビューさせていただいたときの印象を、そして、その印象をレジリエンスという概念で捉えるという試みを書かせていただくことにした。

1 被災地訪問

2011年3月11日の14時46分に起きた東北地方太平洋沖地震は大津波を発生させ、東北地方の太平洋沿岸部を中心に、死者15,854人、行方不明者3,155人、負傷者26,992人の人的被害（2012年3月11日現在）、建造物の全壊・半壊38万戸、漁港の損壊300以上、農地被害23,600ヘクタール、道路の損壊3,918箇所、在来線7線区の23駅および約60キロメートルの線路の流出等々、未曾有の被害をもたらした¹⁾。

これらの甚大な被害状況について、また、被害状況が引き起こすさまざまな社会的問題に対して、被災地の方々の理解と参加を前提に種々の調査研究が進みつつある。私は、5月に、民間団体のあしなが育英会が計画する震災遺児調査の実施可能性探索のための予備的調査に参加した。

あしなが育英会（以下、育英会と略記する）は、震災の2日後に「東日本大地震・津波緊急対応本部」を設置し、0歳から大学院生までの津波遺児を対象とした返還不要の「特別一時金の給付」を決定した²⁾。そして、1か月後の4月には、特別一時金制度の周知を図るため、避難所や保育園、小中学校、高校、大学等を5人の職員と10人の大学奨学生ボランティアで回わるという作業を開始している³⁾。また、阪神淡路大震災後に開設した震災遺児のためのレインボーハウスを東北でも開設することを決定し、その準備に入った。5月には、震災・津波遺児を対象としたケアプログラムを宮城県で、6月には岩手県で実施。これらに先立ち、ケアプログラムに参加するファシリテーターの養成講座も仙台と盛岡で実施している。

育英会は、こうした支援活動を推進していくため、震災・津波遺児と残された親御さんへのインタビューを企画。調査実施は、副田義也（筑波大学名誉教授）をリーダーとする研究者グループに委託された。育英会もグループリーダーも、阪神淡路大震災後に実施した被災者の方々へのインタビュー調査経験から、震災後2か月という時点で震災遺児やその残された親御さんにお話しを聞くことは困難と判断していた。その時点で、すでにさまざまな研究者グループが調査を開始したり、試みようとしていたが、それらは被災された方々から不評をかっていて、という話も伝わっていた。そこで、5月の時点では、すでに育英会の奨学生になっている方の親御さんで仙台在住の方に震災時の話をお聞きするとともに、このたびの震災で被害を受けた方々へのインタビューの可能性や留意点等をお聞きすることになった。合わせて、被災地の状況を直接知るために被災地を訪問することになったが、避難所への訪問は実施しなかった。⁴⁾

調査グループは2班に分かれて、インタビュー等を実施した。私は、高校奨学生のお母さんに開設されたばかりの育英会の仙台事務所で、また、大学奨学生のお父さんに津波被害は及ばなかった地域にあるご家庭を訪問してお話しを

うかがった。その前後に、被害が甚大であった仙台の閑上地区、石巻市、女川町等を訪問した。この訪問では大きな衝撃を受けた。

当時、テレビは津波の映像を繰り返し放映するとともに、避難所の様子を伝えていたが、建物等の被害状況や被災地の実情を捉えた映像はそれほど多く流していなかったように思う。閑上地区や石巻の市街地、女川町の壊滅的状况を目の当たりにしたときは、本当に言葉を失った。これほどまでにすさまじい被害だったのかと。閑上地区ではすでに全壊・半壊の建築物や瓦礫等の片付けが行われていたので、文字通り何もない広大な土地が広がっていた。女川では津波被害に遭わなかった病院のある高台から町を見せてもらった。こちらはほとんどすべての建物が全壊に近い無残な姿でそのままあった。比較的高いビルの上には乗用車がひっかかったまま乗っていた。どうやったらこれほどの壊滅的な状態をつくりだせるのか、と思うほどの状態。このようななかで生き残ることは奇跡みたいなもののように感じた。ただ、道路はなんとか確保され、電柱は新しく立てられたようであった。片づけをする人の姿は見えなかった。女川から南に車で下って石巻まで来る間にも、壊滅状態に近い町や漁村を多く見た。石巻も街の中を車で走れるほどにはなっていたが、沿岸に近いところは多くの店や建物が激しく損壊していた。それはまるでゴーストタウンのようで心が重くなった。

わずかの時間の訪問であったが、3つのことが印象として残った。ひとつは、津波はくっきりとその被害の場所とそうでない場所を分けるということだ。閑上地区は、比較的平坦な土地を津波が侵襲してきたところである。それが、土手のように高くなっている高速道路の下あたりで止まっている。その手前では、全壊・半壊の戸建の家々がまだそのままの立っているのだが、家の枠と壁が部分的に残っているだけで、戸や窓、多くの壁、そして家のなかにあったであろうものすべてがない。ところが、手前から高速道路の下をくぐる道路を通過して高速道路のむこうに出ると、青々とした草花の咲く庭と何も被害を受けていないように見える戸建の家々が連なっている。自宅が全壊・半壊の目に遭った人々は、この違いを見てどんな気持ちになっただろう、高速道路の手前に家があったから仕方がない、となんとか思い込もうとしても、この不条理に頑張る

気持ちなどとてもなれないのではないか。私たち第三者も「頑張って」とはとも言えない、そう思った。被災に遭わなかった同じ地域の人も複雑な心境なのではないだろうか。

こうしたことは、女川町でも感じた。女川町は山と海に挟まれている町で、港からさほど遠くないところから土地が傾斜している。その傾斜が少し急になったところの家は無傷のように見えた。同じ地域で壊滅状態のところと無事だったところと、津波は明確な境界線を残していた。家を壊されないですんだ方々のなかにも、家族・親族を失った方や職を失った方々はいらっしゃるだろうが、何と何を喪失したのか、何を失くさないですんだのかそうした悲しい比較が同じ地域の人々の間でなされるとしたら、なんともやるせない。

印象に残った二つ目は、被災地に近い地域にあっても、救援や復旧に関心を寄せ、支援にかけつける人とそうでない人がいる、ということだった。育英会の仙台事務所でインタビューした女性の高校生の娘さんは、震災後すぐに企業が行うボランティア活動に参加し、避難所に荷物を届けたり、避難所で荷物を仕分けるなどの活動を続けていた。他方、電車のなかで隣の席に座った女子高校生は、私の質問に答えて、自分も友だちもボランティア活動はしていない、でも生徒会が今度なにかをやるらしい、とあまり関心がない言い方をしていた。石巻で乗ったタクシーの運転手さんの話では、被害を受けていない隣町から被害を受けている地域にすぐに救援に出かけたのは、被災地に親族や職場等の知り合いがいる人々であって、そうでなければ町が違うから、、、ということであった。

世の中にはいろいろな考え方の人がいる。また、すぐに動ける人がいる一方、すぐには動けない人がいる。こうしたことは当たり前のことだ。それは地域の団体や組織にしても同じであろう。救援や復旧支援を受け入れる側のキャパシティや準備状況といった条件もある。ただ、隣の町、隣の丁はとてつもない被害を受けているのだが、周囲は意外に冷静なのだと感じた。

最後は、あるタクシーの運転手さんについての話。運転手用の帽子をかぶっていたのだが、彼はそれがあまり似合わない茶髪でスリムな若者だった。最初、この若者がタクシーの運転手であることを意外に感じていたのだが、彼が消防

団の一員として津波被害の救援活動に携わっていた話を聞き、また、話のなかから家族想いのパパであることがわかって、彼についての印象が変わった。

彼はあの地震のときもタクシーを運転していた。渋滞になった道路を避けて車で逃げ、難を逃れた。彼の家族も助かった。彼は職場の先輩に誘われて少し前に消防団に入っていたので、津波の後は救援活動に携わるようになった。不眠不休で取組んだということだった。だが、温泉によく行くという趣味の話はしても、救援活動の内容や感想などはあまり語らなかった。こちらがうまく質問を重ねなかったせいもあるからだろうが、その活動の大変さや苦勞をさほど語らなかったのは意外な気もした。

最近になって『遺体—震災、津波の果てに』（石井光太、2011年）を読み、彼もまた救援者として凄まじい体験をしていたに違いないと思った。その体験は、短時間にさっと語れるようなものではけっしてなかったに違いない。彼が語らなかったのは意外ではなかったのだと今では思う。

2 親御さんへのインタビュー体験

9月になって震災遺児の残された親御さんたちに対するインタビュー調査を開始した。インタビューに協力していただける親御さんたちは、育英会の行ったケアプログラムに参加された親御さんや育英会からの協力依頼に応じてくださった方々である。私は、比較的被害の少なかった松島にある旅館で、他の研究者とともに3人の親御さんにお会いし、お話をお聞きすることができた。

そのインタビューに行く前、知人に東北にインタビューに行くという話をしたところ、大船渡にいる友人は地域に広いネットワークをもっているので、協力者を紹介してくれるかもしれないと言ってくれた。それでその友人に直接電話をかけ依頼したところ、彼がPTAの役員をしている高校の生徒さんとその親御さん何人かにインタビューできるよう校長に頼んでくれることになった。彼は、チームリーダーが書いた依頼文書や育英会の一時給付金のリーフレット等をもって校長に会いに行き、頼んでくれた。だが、校長からは、「自分たち教師も生徒に津波や被害のことを聞かないようにしている。育英会のことはよく知

っているが、今はそれを思い出させるようなことはできない。」といったようなことを言われたとのことで、親御さんへのインタビューも無理、ということになってしまった。

その大船渡の人も、自宅は無事であったが仕事を津波に流された被災者の方で、仕事場再建のために、また、地域の復旧のために奮闘されていた。その人に、電話の向こうから「秋風が立つようになったこのごろ、あの津波以来、張り詰めてきた気持ちが少し緩んできて、何もしたくない、できない、そういう感じなのです。」と優しい声のトーンで言われたとき、被災された方々のお気持ちは、そうなのだろうと理解ができた。インタビューをさせていただきたいという気持ちから、被災された方々の今のお気持ちを推し量ろうとしなかった自分を反省した。

このことを考えれば、3人の親御さんがせっかくの休日にもかかわらず、インタビュー会場である旅館までやって来てくださったことは、本当に感謝すべきことであった。妻を亡くされたお父さん2人と夫を亡くされたお母さん1人に対するインタビューの結果は、他のインタビュー結果とともに報告書にまとめられるものなので、ここに記すことはできない。ただ、私がインタビューで感じた印象等を書くことは許されよう。

まず、お話を通して、3人の親御さんについては「律儀」という印象もあった。辞書風に言えば、「律儀」とは実直、誠実、きまじめ、義理堅さである。そうした言葉どおりの印象を、地震・津波に遭遇した時点、その後の対応、子どもたちの様子などのお話、育英会への要望、社会の対応についての意見などをお聞きするなかで感じた。どういうお話からそのような印象をもったのか、残念ながら具体的に記述することができない。

子どもたちについては、「健気」という印象であった。親御さんたちのお話からは、小学校低学年の子どもも中学生、高校生たちも、残された親や親族を気遣い、亡くなった親への悲しみを表現せず、むしろ快活に振る舞っていた様子が見えかけた。しかし、子どもたちがいきなり「大人らしく」振る舞う「健気」には無理がある。そのことは聞いているなかで心配になった。だが、彼らが残された親御さんと亡くなった親御さんについての思い出を比較的早い時期から

話せるようになっていたことを聞いて、安心した。

つぎに感じたことは、職と子どもを失わずにすんだことの大きな意味である。お話をしてくださった方たちが、自宅の損壊だけでなく配偶者や親族も失われるという悲惨な体験のなかでも、自分を失うことなく生活再建に取り組まれているのは、職を失わずにすんだこと、子どもを失わずにすんだこと、が大きいと感じられた。職を失わずにすんだ安堵感、亡くなった配偶者のためにも子どもたちをきちんと育てるという責任感が、親御さんたちの行動を前向きのものにしていた。

また、相当過酷な状況に置かれているにもかかわらず、自分たちよりももっと悲惨な目にあった人は多い、自分たちはまだ恵まれている、といった発言があった。この発言を聞いて、一気に多くのものを失わざるをえなかった不条理を乗り越えるには、なんとか納得できる状況の意味づけが必要なのだとあらためて感じた。

感動したのは、若いお父さんの子育てについての考え方とその実践であった。子どもたちが萎縮することなく育つには、いろいろな人と触れ合いさまざまなことを考えることが大切、その触れ合いを通して助けてもらった人に恩返しできるような大人になってほしい、そうした思いから、育英会のケアプログラムに子どもを参加させ、今後も参加させたいと考えておられた。また、自分自身も同じ境遇にいる他の親御さんが子どもにどう対応しているのかを学びたいとの思いから、プログラムに参加されていた。親御さんも子どもたちも祖父母を初めとする親族や友人たちに見守られ支援されている。そういう状態であってもなお、母親を失った子どもたちのために同じような境遇にある人/あった人とのつながりを広げたい、広げてやりたい、その強い思いが感じられた。

3 レジリエンス概念による理解

昨今、子ども家庭福祉分野やソーシャルワーク研究において、レジリエンスという概念が注目されるようになってきている。心理学や教育学では、「回復力」といった個人の心理特性を、防災研究では地域の「しなやかさ」、「防災力」とい

った意味で、すでに活用されている概念である。社会福祉では、「リスクや逆境にもかかわらず、よい社会適応をすること」といった意味で用いられている⁵⁾。逆境を乗り越えて社会的に適応していくのは、個人の力や特性によるよりも、個人が適応していくことを可能にする環境側の要因の力が大きく、その環境要因に焦点をあてるとともに、個人とその環境との相互作用の過程を研究対象とすべき、という考えから、ソーシャルワーク論の研究者である秋山薊二はソーシャルワークにおいてこそレジリエンスを研究すべきであると言っている⁶⁾。レジリエンスに関して多くの文献を書いているUngar, M.は、レジリエンスとは、「逆境のもとにあって個人のウェルビーイングを促進する個人と環境との相互作用であり、その相互作用の可能性は、個人的成長のために応用可能でアクセス可能な機会と提供される資源の質に依存する。」と定義している⁷⁾

児童虐待という過酷な体験をした子どもたちにあっても、良好な発達をとげる子どももある。こうした子どもたちのよい適応はどのように可能になったのか、子ども家庭福祉では、環境要因や環境要因と子どもとの関係性等をたんねんに調べることで、防御要因を見出すことができると考えられている。防御要因とは、逆境やリスク（将来の望ましくない結果をもたらす確率を高める要因）にもかかわらず良好な結果をもたらすことに貢献した要因のことである。よりよい適応を促進する促進要因とも言える。リスク要因と防御要因を明らかにしていくことは、逆境を乗り越えるための支援の提供においても、また、逆境に陥らないようにするための予防福祉の実践にも役立つだろう。レジリエンス概念は、事後的に介入することが中心的であったソーシャルワーク実践を予防ソーシャルワークに拡大していく可能性を秘めているのかもしれない。

レジリエンスの概念は、児童虐待に携わるソーシャルワーカーら、支援する側のストレスやバーンアウトからの回復、その予防対策を推進していくうえでも重要な概念としても注目されるようになってきている⁸⁾。Murray, Kらは、このレジリエンス概念を個人だけでなく地域にも拡大し、コミュニティ・レジリエンスとか集合的レジリエンスという概念を提唱している。そして、コミュニティの精神的衝撃や物理的災害にもろい側面だけでなく、コミュニティの強み、資産資源といった肯定的側面も評価し、コミュニティのレジリエンスのプロセス（回

復、維持、成長)とコミュニティの生活をより正確に描き出すことが重要であると述べている⁹⁾。

東日本大震災からの地域の復興について、地域福祉の観点からの研究もスタートしている。コミュニティ・レジリエンスという概念はまだあいまいで、果たして操作概念を作れるのかも不明だ。だが、少しでもよい結果が出ている地域は何がそうした結果を生み出したのか、それを探るという視点をもたらしてはくれる。その防御要因や促進要因を地域研究のように地域に密着して明らかにしていく、あるいは、すでにある防御要因や促進要因が拡大していくように働きかけていく。こうしたことが地域福祉の実践的研究のあり方として考えられるかもしれない。だが、被災地訪問でわかった隣町との違いや道路隔てただけでの違い、同じ被災者のなかでも失ったものの数や種類の違い、その意味づけの違いなど、地域におけるさまざまなギャップや、被害を受けた地域が広大すぎることを考えると、コミュニティ・レジリエンスが果たして考えられるのかどうか懐疑的になってしまう。

しかし、個人のレジリエンスについては、3人の親御さんへのインタビュー体験から、震災被害がもたらすであろう種々のリスクに対する防御要因を考えることができるのではないかと思った。たとえば、子どもの防御要因は、①残された親との良好な親子関係があること、②亡くなった親について残された親と話す機会をもっていること、③自分の境遇について安心して話せるような居場所があり仲間がいること、などである。親の場合は、①就労機会が保障されていること、②愛情と責任をもつべき家族(子ども)がいること、③親族・友人等のインフォーマル・サポートが継続的にあること、④子育てに関して利用してみたいと思えるフォーマルなサービスを利用できていること、⑤逆境を意味づけなおすことができていること、などであろうか。

このように考えると、3人の親御さんやそのお子さんたちは、震災の被害体験が今後もたらすかもしれない種々のリスクにもそれなりになんとか対処していけるのではないかと思うことができる。また、子どもたちがリスクを乗り越えていけるレジリエントな大人になっていくには、まずは、親の防御要因の充実が重要と改めて確認することができる。社会的には、なによりも親の①就

労機会の保障を急ぐ必要があると言うこともできる。そして、育英会がケアプログラムとして提供しているような、親にとっての④子育てに関して利用してみたいと思えるフォーマルなサービス、子どもにとっての③安心していられる居場所や仲間づくりの機会を提供するサービスは、親にとっても子どもにとって防衛要因として大きな働きをする可能性をもっていると考えることができる。

おわりに

東日本大震災の発生から間もなく1年になる。いまだに親が行方不明という子どもたちがいるであろうことを考えると、胸のふさがる思いがする。震災遺児を含め、被災した子どもたちすべてに幸せになってほしい。そのために、親を保護者を、地域を、自治体に対する支援を、さまざまな形で、着実に、継続的に行っていかなければならない。それは社会の責任だ。

最後にあらためてお話を聞かせていただいた3人の親御さんに心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。また、調査途上にもかかわらず、調査に関する感想執筆を許可してくれた、あしなが育英会の震災遺児調査グループのリーダーおよびメンバーにも感謝申し上げます。

(注)

- 1) 日本経済新聞社、2012年3月11日、東日本大震災(地震・津波)被害状況専門サイト <http://ranasite-net/#Engan> (2012年2月29日)、朝日新聞2011年4月4日、読売新聞2011年4月5日
- 2) 震災遺児、津波遺児という言葉は、親が行方不明状況にある子どもたちも含めている。遺児という表現がその子どもたちや残された親御さんたちに与えるかもしれない影響を考慮すれば、異なる表現をしたほうがよいのではないか、調査チームのなかではそうした意見も出たが、他に適切な表現も見つからなかった。本論でも同様の意味で震災遺児という言葉を使っている。
- 3) 特別一時金の給付対象は、2011年7月初旬にすでに1,500人を越えている。
http://www.ashinaga.org/higashi_nihon/entry-446.html (2012年1月30日)、2012年3月15日現在2,000人を越えている。
- 4) インタビュー調査は10月にも実施し、2013年3月にも3回目の調査が予定をされてい

る。その後も継続して行う予定である。

- 5) 庄司順一 (2009) p.41
- 6) 秋山は、この意見にもとづき2012年6月9-10日に関東学院大学で開催される第29回ソーシャルワーク学会大会のテーマを、「レジリエンスによるソーシャルワーク論とその実践」としている。
- 7) Ungar,M(2011)p.14
- 8) ACS-NYU Children's Trauma Instituteは、児童福祉スタッフの二次的トラウマ対応としてレジリエンス促進のためのガイドブックを刊行している。この文献は澁谷昌志氏に教わった。
- 9) Murray, K and Zautra, A.(2011)pp.342-343

(引用・参考文献)

- ACS-NYU Children's Trauma Institute, The Resilience Alliance Promoting Resilience and Reducing Secondary Trauma Among Child Welfare Staff (http://www.mctsn.org/sites/default/files/assets/pdfs/resilience_alliance_trainin_manual.pdf) (2012年2月5日)
- 門永明子 (2011) 「子ども家庭福祉実践におけるリスクとレジリエンスの視座の可能性」『子ども家庭福祉学』10号
- Murray, K and Zautra, A, (2011) Community Resilience: Fostering Recovery, Sustainability and Growth, in Ungen, M., ed., Social Ecology of Resilienc: A Handbook of Theory and Practice, Springer
- 佐藤舞子 (2001) 「現地の人たち自身による故郷の復興を支援したい」、『そだちと臨床』Vol.11
- 庄司順一 (2009) 「レジリエンスについて」、『人間福祉学研究』2-1
- Ungar,M.(2011)Social Ecologies and their Contribution to Resilience, in Unger, M., ed., The Social Ecology of Resilience: A Handbook of Theory and Practice, Springer